第二十一講　メディア論・情報化社会論

バリー・サンダースの『本が死ぬところ暴力が生まれる』は、書評などでも好意的にとりあげられているが、同書はまさに問題の回避の仕方という点において巧妙である。

サンダースの論議は要約してしまえば、電子メディアという文字を欠いたメディアに接することで、文字によって形成されるべき「自己」が未成立のままになったり、あるいは崩壊し、その結果として「暴力」への歯止めが失われる、というものだ。同書を一読すればわかるのだが、この論議は「識字」をめぐって未だに明らかに文化的階級差がある社会相を前提としている。アメリカ社会がそうであるのか、それともこれは書き手の偏見なのかはここでは問題としないでおく。だが、その程度には充分に危うい側面を持っていることだけは注意を喚起しておく。

同書は映像メディアが大衆を知的に退化させる、というありふれたメディア論を電子メディアに置き換えたにすぎない。そして「識字」の世界にある著者自身の〈私〉をつまりは遠回しに擁護している。その点で日本における自己肯定的電子メディア論と共通の枠組みを持っている。

だが実は、インターネットは文字のメディアである。そこでやりとりされる情報の大半は圧倒的に文字情報であり、そこは新たな「識字」の世界なのである。

インターネットなり電子メディアなりをめぐる論議が忌避しているのはまさにこの点であるように思う。これまで俗的になされてきた「新しいメディア」への批判は、それが非「識字」的な映像視覚メディアである、ということが前提となっている。そこには暗黙のうちに旧メディア、つまり「識字」メディアとそれに支えられた教養が擁護される、という構図になっている。さらに言ってしまえばこのような「教養」の担い手としての知識人の特権性が擁護されるのである。

インターネットをめぐる論議や政策への参画に知識人が熱心なことの背景も実はこのあたりに見出せるのだが、知識人によるインターネット論は旧「教養」の電子メディアによる延命にあるのだから、当然と言えば当然である。

だが、一方では映像メディアとしての電子メディアを批判し、他方では「識字」的な知の電子メディアによる肯定を画策する

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

言説は明らかにダブルスタンダードであることは言うまでもない。しかもそこには、メディアの「受け手」としての大衆は批判され、送り手としての知識人は肯定される、というもう一つの構図があることを指摘しておくべきだろう。ここには実はインターネットをめぐる本質的な問題、つまり、「送り手」と「受け手」の差異の喪失への脅（おび）えが見てとれるように思うのだ。インターネットという双方向性のメディアは、「啓蒙する知識人」と「愚かな大衆」という、未だに知識人の大半が心の奥底では依存したがっているであろう枠組みを根本的に解体する。

粉川哲夫はインターネットを、国家を越境しようとする個人と、それを寡占しようとする国家や企業の対立として図式化するが、そんな対立はいかなるメディアにも見出せるものであり、インターネットにおいて隠蔽（いんぺい）されている対立とは実は「大衆」と「知識人」のそれである。誰でも発信者となれるインターネットは「啓蒙する知識人」の特権性を支えてきた情報や言説の発信権をいまさらながら無化してしまう。既に解体しつつあったものにとどめをさしてしまう装置としての側面を持つ。

だからこそぼくより年長の「知識人」たちはタイタニックの乗客よろしくインターネットに飛び移ろうとしているのだろうが、それは少なくともかつての「知識人」にとっては泥船のようにも思える。うまくは言えないが新しいメディアの中で生き延びるのは、やはりその D新しい場にふさわしい類の「ことば」や「知」や、それらの「主体」ではないか、と思うのだ。楽天的インターネット論者たちにぼくが違和を覚えるのはまさにこの点で、自らの依存する「知」や「ことば」、そしてそれらによって形作られる「私」といった旧メディアに帰属してきたものが、本当にそっくり、何の軋轢（あつれき）もなく置き換えられる質のものなのだろうか、ということだ。

（大塚　英志「インターネットの〈私〉」による）

注　○バリー・サンダース――アメリカの社会学者

○粉川哲夫――社会学者

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問１　傍線部Ａ「問題の回避」とはどういうことか。次から最も適当なものを一つ選べ。

①　同書が、文化的階級差の存在を前提にしていること
②　同書が、「識字」をもって文化的階級差と見なすこと
③　同書が、著者自身の〈私〉を擁護するために書かれていること
④　同書が、電子メディアの問題を映像メディアの問題にすりかえていること

問２　傍線部Ｂ「日本における自己肯定的電子メディア論と共通の枠組み」とはどういう枠組みか。次から最も適当なものを一つ選べ。

①　インターネットの映像性を否定しながら、「識字」的な知の可能性を探ること
②　インターネットを、いずれは沈む泥船であると考えながら、その中で生き延びようとすること
③　インターネットを双方向のメディアと捉えながら、「知識人」と「大衆」という図式に依存すること
④　インターネットは国家を越境するものであると考えながら、一方で国家がそれを独占すると考えること

問３　傍線部Ｃ「知識人の特権性」とは具体的に何か。文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問４　傍線部Ｄについて、筆者は「新しい場」の特徴をどのようなものと述べているか。文中から次の［　　］にあてはまるように十字以内で抜き出して答えなさい。

［十字］こと

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　大塚英志＝おおつか　えいじ（一九五八〜）東京都生まれ、筑波大学人文学類卒、神戸芸術工科大大学院で博士号。消費社会、芸術、マンガ、アニメなど様々なテーマで旺盛な評論活動を行っている。著書多数で、入試でもよく出題されます。なおテーマとしての「情報化社会論」は、受験サプリ「高３トップ＆ハイレベル現代文」の第三講、第二十四講でもあつかっています。こちらもぜひ、アタックしてみよう。

語句

書評＝しょひょう→出版された本の紹介や批評・コメント

巧妙＝こうみょう→技術や方法が感心するほど見事で巧みであること。本文では、否定的に、つまり皮肉で使っている

要約＝ようやく→文章の要点、肝心なところをコンパクトにまとめること

識字＝しきじ→リテラシー・素朴には文字が読み書きできるということですが、ある程度高い「教養」として使われることもある。本文ではこの意味。

社会相＝しゃかいそう→社会の顔、ひとつの側面。社会のありさま、特徴

喚起＝かんき→注意を呼び起こすこと　同音異義語「換気」→空気を入れ替えること

擁護＝ようご→攻撃からかばって守ること・味方になって弁護すること

忌避＝きひ→きらって避けること

俗的＝ぞくてき→一般的、日常的

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ダブルスタンダード→二重基準。一貫性を欠き、相反する基準を都合よく持ち出し、対応すること。例えば、親がわが子に対して、ある場面では「もう子供じゃないんだから、しっかり責任をもちなさい」と言ったり、また違う場面で「まだ子供なんだから生意気なことを言うんじゃありません」と言ったりするケース。言われる方は、混乱するよね、どうしたらいいんだよ！

啓蒙＝けいもう→無知蒙昧（むちもうまい）、知識や教養のない者に、知（智）の光を授け、教えひらくこと。英語ではenlightenment 無知が暗闇で、知恵が光に例えられることはよくあります。上智大学のモットーもLux Veritatisで、ラテン語で真理（知）の光という意味です。

寡占＝かせん→少数者で何かを独占すること。「寡」は、少ないという意味で「多寡を測る」といえば、量の多い少ないをみつもること。「寡婦」は、夫を失った女性で、未亡人のこと

隠蔽＝いんぺい→発覚しないように隠すこと。隠匿（いんとく）や秘匿（ひとく）もほぼ同義語

タイタニック→一九一二年、イギリスからアメリカへの処女航海で、氷山に衝突して沈没した大型豪華客船。ジェームズ・キャメロン監督、レオナルド・ディカプリオ主演の映画、その名も『タイタニック』が有名です（アカデミー賞で作品賞や監督賞などを受賞）。他にも『タイタニックを引き揚げろ』という作品がありますが、こちらは映画より、クライブ・カッスラーの原作小説の評価が高いです

主体＝しゅたい→考えたり、発言したり、行動したりする当事者

軋轢＝あつれき→争い、不和、いざこざ、葛藤（かっとう）、関係のきしみ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第二十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）あらかじめ危険をカイ避する　①回　②誡　③開　④解　⑤改

（イ）犯行のコウ妙な手口を明らかにする　①硬　②効　③巧　④考　⑤光

（ウ）長い文章資料を簡潔に要ヤクする　①訳　②役　③厄　④約　⑤躍

（エ）建築物の基礎部分がホウ壊する　①放　②砲　③崩　④泡　⑤保

（オ）市民に向けて注意をカン起する　①勘　②感　③換　④喚　⑤歓

（カ）思想信条から兵役をキ避する　①飢　②危　③忌　④貴　⑤奇

（キ）市民向けのケイ蒙活動に従事する　①掲　②啓　③経　④契　⑤慶

（ク）巨大な舞台ソウ置が搬入される　①総　②葬　③創　④壮　⑤装

（ケ）知識人のトッ権意識を改める　①得　②徳　③特　④匿　⑤突

（コ）単純なコウ図で社会を考える　①講　②構　③校　④侯　⑤考

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十一講　メディア論・情報化社会論

《本文の対比構造》

主役＝筆者によるネット論

ネットは文字のメディア
新たな「識字」の世界
「送り手」と「受け手」の差異の喪失
誰もが発信者

主な対比

敵役＝従来型の知識人によるネット評価

バリー・サンダース
『本の死ぬところ暴力が生まれる』
＝電子メディアは文字を欠いたメディア
映像や電子メディアは
大衆を知的に退化させる
「大衆」と「知識人」の区別
「識字」「教養」、
知識人が自身を擁護

小さな対比

脇役＝粉川哲夫によるネット論

国家を越境する個人と
越境を寡占する国家、企業の対立

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

「同書」つまり、『本が死ぬところ暴力が生まれる』について、筆者は批判的に語っています。それが「問題の回避」とくに「回避」という表現です。しかも、そのやりかたが「巧妙」というように皮肉をこめています。第五段落冒頭の「インターネット〜論議が忌避」も同様の批判です。①の「文化的階級差の存在を前提」、②「『識字』をもって文化的階級差と見なす」、③の「著者自身の〈私〉を擁護するために書かれている」は、いずれも本文の記述には合致しています。しかし、肝心の傍線部「問題の回避」という批判の説明にはなっていません。肝心なのは、以下のことです。すなわち、「同書は映像メディア（電子メディア・インターネット）が大衆を知的に退化させる」と見なしているが、「だが実は、インターネットは文字のメディアである」（これが筆者の見解）。つまり、バリー・サンダースは、ネットの本当の姿をとらえそこなったまま、ネットの問題を挙げているわけで、これじゃ問題の焦点がズレてるよということです。それが「問題の回避」ということ。これじゃ、議論がかみあわないよ、建設的な討論に発展しないよ、と筆者は考えているようです。こういうわけで④が正解です。他は、その肝心ではない別の部分だけを拾っています。この点では、部分的指摘の誤りといえるでしょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

アメリカの学者バリー・サンダースの議論と日本の知識人の議論との「共通」点を挙げる問題ですよ。そろいもそろって敵役ですぞ。「自己肯定的電子メディア論」といっているのは、従来タイプの知識人が、自分たちの「識字」、本を書ける教養をよしとし、その立場から、ネットの事を語る議論です。内容としては、ネットは文字ならぬ映像メディアと決めつけて、自分たちより劣ったものとみなす考え方です。したがって、①が正解です。②は、「インターネットを、いずれは沈む泥船であると考えながら」が、×です。従来型知識人は、ネットをばかにしながら、一方で、それによる自分たちの延命策を考えています。こんな二重基準（ダブルスタンダード）でネットを考えている知識人、言い換えれば、従来と異なる「新しい識字」が必要なのだという認識を欠落させている知識人にとっては、ネットは新しい可能性をひらくどころか「泥船」だろう、とは筆者の見解です。従来型知識人が「泥船」と認識しているわけではありません。つまり、この選択肢は、筆者の見解と敵役の見解を混ぜてしまった

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

間違いです。対比混乱の誤りです。③は、後半の「『知識人』と『大衆』という図式に依存」は、従来型知識人の発想としてOKですが、前半がまずいです。「インターネットを双方向のメディアと捉え」は、筆者の見解です。ゆえに、対比混乱の誤りです。④は、粉川哲夫の見解として紹介されているものです。《文章の対比構造》で図示してあるように、脇役です。つまり、主役の筆者の見解でもなければ、敵役の従来型知識人の見解でもありません。問２は、敵役の説明を求めている問題ですから、そこに脇役を持ち込んだりしては、これはこれで対比混乱の誤りです。

問３《傍線部説明・抜き出し》

今回の敵役である、旧来の知識人たちが保持しようとしているものです。しかも、インターネットによって失おうとしているものです。「知識人の特権性」については、終わりから二段落目に「『啓蒙する知識人』の特権性」として繰り返されています。では、その内容、中身はなにか、それが問３の答えになります。「情報や言説の発信権」です。「『啓蒙する知識人』の特権性を支えてきた」ものですから、内容言い換え、コンテンツになります。

問４《傍線部説明・抜き出し》

「新しい場」とは、インターネットのもたらす言論、表現の空間のことです。では、それはどのような意味で「新しい」特徴を持つのか、旧来の考え方をどう変えてしまうものなのか、その中身が答えです。まず、従来の考え方とは、啓蒙する（上から目線で教えてあげる）知識人、つまり情報や知識の発信者である知識人とそれをただ受け取るだけの大衆という二分法的な区別を前提とする考え方です。ネットはそれを変えた！　そうした二分法的区別を喪失させ、「無化」したのです。かくて、ネット空間はどういう「場」なのか。すなわち、「誰でも発信者となれる」場なのです。これが答えです。ちなみに『ウェブ進化論』の筆者、梅田望夫氏は、〝総表現社会〟というネーミングで、情報化社会のことを語っています。

模範解答
問１＝④　問２＝①　問３　情報や言説の発信権　問４　誰でも発信者となれる

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第二十一講

（ア）①
（イ）③
（ウ）④
（エ）③
（オ）④
（カ）③
（キ）②
（ク）⑤
（ケ）③
（コ）②

解答漢字一覧

（ア）回避
（イ）巧妙
（ウ）要約
（エ）崩壊
（オ）喚起
（カ）忌避
（キ）啓蒙
（ク）装置
（ケ）特権
（コ）構図

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。